

美術史学会 美術館博物館委員会東西合同シンポジウム

“伝説”を創る現場—展覧会の可能性を求めて—

日時： 2010年5月1日（土） 10：00～16：50 （9：40受付開始）

会場： 大阪大学中之島センター10F 佐治敬三メモリアルホール

（大阪市北区中之島 4-3-53 ※国立国際美術館・大阪市立科学館北側）

アクセス <http://www.onc.osaka-u.ac.jp/others/map/index.php>

主催： 美術史学会

後援： 全国美術館会議、文化資源学会、日本アートマネジメント学会

定員： 180名（美術史学会員以外の参加も可、参加無料、事前申込不要、先着順）

開催趣旨

現代の日本は政治経済から文化芸術に至るまで激変期にあります。美術史学会は2003年、「科学研究費助成金申請」の問題から東西合同シンポジウムを開催し、美術館・博物館をめぐるさまざまな問題を議論してきました。前回は、文部科学省が進める学芸員資格取得要件の見直しと、博物館法改正の努力項目にあげられた館の「自己評価およびその公開性の促進」をテーマとしましたが、今回は前回のシンポジウムでの提案を受け、前半では、科学研究費の指定館になるプロセスについて理解を深める場を設けたいと考えます。また、シンポジウムの中心となる後半では、美術館・博物館や大学関係をはじめ様々な立場で展覧会企画に携わる現場をとりあげます。何十万もの入館者を集めて〈記録〉に残る展覧会ではなく、規模は必ずしも大きくなくても、研究成果を反映し、質の高さと内容の充実において来館者に驚きと感動を与えて〈記憶〉に残る、“伝説”と呼ばれるにふさわしい展覧会を検証します。美術館・博物館受難の時代であるからこそ、希望をもって“明日”に開催されるべき展覧会の可能性を探りたいと思います。

プログラム

開会・趣旨説明

- 10:00 開会あいさつ：百橋明穂（美術史学会西支部代表委員・神戸大学）
趣旨説明：橋爪節也（大阪大学）

第1部 科学研究費の指定館をめぐって

- 司会：吉中充代（京都市美術館）
10:20－10:50 報告「科学研究費の指定館になるために」
内田啓一（昭和女子大学）
10:50－11:20 「財団統合と科研費指定館の再申請について—大阪市の美術館博物館施設のケース」
石川知彦（龍谷大学龍谷ミュージアム 教授[学芸員]）
小林 仁（大阪市立東洋陶磁美術館 主任学芸員）
11:20－11:50 質問

休憩

第2部 シンポジウム 企画の現場—展覧会の可能性を求めて

- 司会：荒川正明（学習院大学）
プレゼンテーション
13:00－13:20 1 「誰が、いかにしてだまされたのか？—「だまし絵」展」
速水 豊（兵庫県立美術館 学芸員）
13:20－13:40 2 「窮すれば通ず～何故、芦屋で大阪画壇なのか？～」
明尾圭造（芦屋市立美術博物館 学芸課長）
13:40－14:00 3 「準備室主催の展覧会—グラフィックデザインを展示して—」
菅谷富夫（大阪市立近代美術館建設準備室 主任学芸員）
14:00－14:20 4 「地獄めぐりと説教絵本～あの世の情景展」
安村敏信（板橋区立美術館 館長）
14:20－14:40 休憩
14:40－16:50 全体討論—展覧会について語り合おう
司会：橋爪節也（大阪大学）
会場進行：内田啓一（昭和女子大学）／吉中充代（京都市美術館）
コメント：荒川正明（学習院大学）／林 温（慶應義塾大学）
16:50 閉会

[要 旨]

第 1 部 科学研究費の指定館をめぐって

報告「科学研究費の指定館になるために」

内田啓一（昭和女子大学）

文部科学省を訪ねて確認した指定館になるための条件を美術館博物館委員から報告する。

「財団統合と科研費指定館の再申請について—大安市の美術館博物館施設のケース」

石川知彦（龍谷大学龍谷ミュージアム 教授[学芸員]）

小林仁（大安市立東洋陶磁美術館 主任学芸員）

大安市では本年 4 月より市立の美術館博物館施設の一元的管理運営のため、美術館博物館施設を指定管理者として運営してきた二つの財団の統合が実施される予定である。それとともに、従来直営であった館についても統合財団による指定管理者制度に切り替わる。こうした大安市の美術館博物館施設の運営形態の変更に伴う科研費指定に関する現状について紹介したい。

第 2 部 シンポジウム 企画の現場—展覧会の可能性を求めて

1. 「誰が、いかにしてだまされたのか？—「だまし絵」展」

速水 豊（兵庫県立美術館学芸員）

「だまし絵」展は、2009 年 4 月から名古屋、東京、神戸の 3 会場で開催され、合計約 75 万人の来館者を迎えた。これは 3 つの美術館の学芸員および共催新聞社事業部が共同で企画、組織した展覧会である。手本とすべき先例としては、1994-5 年に神奈川県立近代美術館ほか 4 会場で開催された「視覚の魔術展」があったが、本展では、西洋古来のトロンプ・ルイユから現代の作品まで、歴史的なパースペクティブをより重視し、特に 20 世紀美術を多く展示して、現代美術におけるイメージのあり方を検証しようとして試みた。同時に、若年層も含む来館者が多様な美術作品に触れる機会を提供することを意図し、解説などを工夫するとともに、幅広い層にアピールすべく広報も行った。結果、来館者数は主催者の予測をはるかに越えるものとなったが、その原因は何か。また、企画者の意図は本当に報われたと言えるのか。本展は、美術館における美術鑑賞、展示環境のあり方についても改めて考えさせる機会となった。

2. 「窮すれば通ず〜何故、芦屋で大阪画壇なのか？〜」

明尾圭造（芦屋市立美術博物館学芸課長）

平成 3 年の開館以降、様々な経緯で直営の業務委託（展覧会等事業と人件費）となった芦屋市立美術博物館。大規模展とはほど遠いが、開館以来、自主企画を繰り返して来た本館は、いまだ学芸魂を死守している自負心がある。ただ、そのこと自体、市民が真に欲することであつたのか。今まさに自問自答の直中にある。

もとより、館の規模や学芸員数、投入される事業費の多少といった根本的な問題を抜きに

した博物館論争ほど無意味なものはないだろう。さりながら、現状を嘆き、制度の批判に明け暮れることは時間の浪費に過ぎない。

従前の財団時に比べて予算規模削減の現状で如何なる実践を繰り広げて来たのか。具体的事例によってしか博物館評価はなし得ないではないか。

よって、後ろを向いた繰り言ではなく、平成 18 年以降、具体的に進めてきた大阪画壇の顕彰事業を取り上げ、借り物でない新たな文化継承の重要性を紹介したい。そこに作品が無名かつ小規模であるが故の問題点を内包することも含めてである。

また、財団時から継続しているアートフリーマーケットや新たな事業としての古書即売会、料亭とのタイアップ企画など独自の自主事業の実践例も合わせて報告したい。

3. 「準備室主催の展覧会—グラフィックデザインを展示して—」

菅谷富夫（大阪市立近代美術館建設準備室主任学芸員）

グラフィックデザイナー早川良雄の回顧展「早川良雄の時代—デザイン都市・大阪の軌跡」について紹介します。グラフィックデザインの展覧会を企画する上で、特に、展示方法について工夫を必要としました。この展覧会では二つの視点から展示を構成しています。まずそのデザインがどのように見られていたかということです。会場の半分を占めるポスター作品はサイズにあまりバリエーションが無く、同じサイズのものが続くと見るほうは退屈します。そこでポスターは街の中、時代の中で見られてきたという原点に戻り、ポスターが発表された時代の大阪の街頭写真を拡大して展示壁の壁紙として貼り、その上にポスターを掛けました。観覧者にとってその時代の街の雰囲気と同時に感じ取ってもらえたと思います。二つ目はデザインの特徴を十分に分かる展示を心がけたことです。本の装丁などは、裏表あるいは箱の装丁も含めてつくられているので、ケース内に置いただけでは全体が見えません。そこで裏表が見えるような展示を行いました。さらに展示のほかにも、グラフィックデザイナーの回顧展ですから、告知用のポスター、カタログなどもデザインに配慮したものとしました。

4. 「地獄めぐりと説教絵本～あの世の情景展」

安村敏信（板橋区立美術館館長）

2001年に当館で行った「あの世の情景」展を例に、展覧会の作り方をお話したい。

この展覧会の企画の主旨は、江戸時代の宗教美術（例えば仏画）に対する美術側からの認識が低いことに対するひとつの提案をしたいことがひとつ。江戸の仏画はレベルが低く、信仰心も薄れているので、美術史として取り上げる必要はない、という一般的な認識に対し、信仰心が低いからこそ、自由な発想の仏画が生み出され、思いもよらぬ表現があるのではという期待から始まった。

民俗学研究者と共に東北地方を調査し、表現としての面白さを中心に作品を集めた。地獄絵、地獄から帰ってきた人の物語絵、極楽の絵を陳列することにする。

あの世に行くには、まず死んでもらわなければならない。そこで会場へ入る前に臨終の場を設けた。ついで地獄の壁面を真っ黒に、極楽のそれを金ピカにした。そして最後に、あなた（来場者）にとっての地獄・極楽を書いてもらいそれを貼りつけてゆく。来場者にこのコーナーが最も人気があった。

さらに教育普及事業として行った「地獄・極楽ガイドツアー」の様子なども含めてお話したい。